

史料紹介

今泉家文書

「明治十丁丑春
薩州西郷吉之助隆盛蜂起」

薩州西郷吉之助隆盛蜂起

米水津古文書解説会

- 井上 安徳・菅野 隆光
- 濱田 平士・児玉 潤子
- 三股 廣喜・吉田 勝重
- 吉田 齊次郎

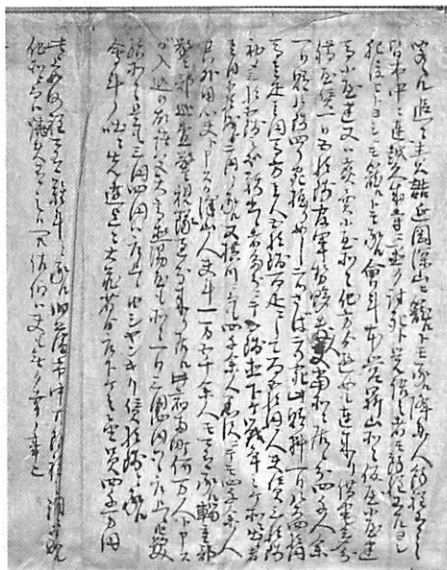
この文書は佐伯歴史資料館所蔵の「今泉家文書」の中にある「明治十丁丑春薩州西郷吉之助隆盛蜂起」である。ご存じのように、明治十年二月に勃発した、いわゆる西南戦争は、熊本・人吉を舞台に展開し、九月の鹿児島城山での西郷隆盛自決で終了した。

この間、佐伯では宇目を中心にして戦いがあり、多くの人々が戦争に巻き込まれた。

この文書には、当時の佐伯市内での様子や風聞が細

かに描写されている。





【解説文】

明治十丁丑春薩州西郷吉之助隆盛蜂起

五月十三四日頃重岡二巡查罷越旧藩ノ人七八名他方ヨリモ罷越居ノ屯所相詰候処薩賊纒之人數ニテ押入然ルニ皆刀釵ハ所持不致銘々ノ逃散山林類者田ノ中ニ打伏居ルオ追マハシ山林ニモ追詰打伏居ル上オモノ飛越シ追マハシ候ヘ共幸イト夕暮ニテ人顔も見ヘ兼候時分ニテ皆々無ノ別条逃延竹田分出入候巡査吏人討死ス翌日ハ此地ニ来ル評判有之ノ旧藩市中共

大騒動銘々荷物片付近在浦ヘ持運ヒ數百ノ小船東ハ町ノヨリ塩濱迄繫西ハ蛇崎マテモ繫不一方混雜然ル処用務所分ノ觸ニ急ニ来ルノ事も有間敷遠見遣し有之間来り候様見受候ヘ者為知ニ大鐘突可申ノ夫才合圖ニ立退候様ト觸有候廿六日前八時頃大鐘鳴らし騒キ立我先ニトノ立退候店方ハ戸オメテ忝人モ居ラヌ家モ有又ハ家内ハ退テ留守番スルノ家モ有ル午後二時頃賊入込一番ニ用務所ニ押入候ヘ共一人モ居不申ノ裁判所戸倉借宅ニ押入レ共一人モ居不申同所土蔵才開荷物痛候由ニ候ノ夫市中ニ来亭主相尋候ヘ共昨日今出候テ行方不相知ト皆申ス何事ナシノ旧藩ニモ參ラレ候ヘ共一人モ居ル者無之市中ニ留守番アル家宿頼マレルノ銘々相賄候夜廻リ無由断致サレル由翌朝ハ皆々立出所々相堅メノ居ル由當時渡町住居ニテ平穩ニ暮シ候前七時頃炮發近ク聞ヘルノ石間沖ニ軍艦来リ十人斗傳問ニ乗組上陸之砌蟹田坂ニ待受炮發ノ五六人討果ス由伝聞ハ其俣引取ル由夫分軍艦分市中ニ向ケ度々ノ大砲發シ候ヘ共途中ニテ玉ハヒラキ落ル此玉ノ通ルヲ渡町畑ニ出テ見ルノ二三度ハ船頭町迄モ通ルアレトモ遠方ニテ火移リ不申幸イノ

事也／翌日ハ引拂白杵ニ罷越ス由又白杵否當近在二
来リ屯致居候處／官軍ニ追々實詰ラレ横川ニ引取山
ニ籠リ候酒屋裏畑否互ニ炮戦／至居リ家ノ屋根ヲ打
越シ瓦餘程痛メル酒屋ノ者皆々立退候市太郎／其御
罷越居候而右之咄書候夫否字目ニ押寄日々炮戦討死
之／死骸日々市中ニ持運ヒニ成候横川酒屋裏ノ畑ニ
仮屋建人夫四ノ千人モ居ル由酒屋モ貸渡候昼夜ヲワ
カラス出入ニテ何日モ一睡不相成／月形市ニ煮賣屋
百余軒モ出来又黒澤ニテモ日々炮戦ノ音ノ聞ヘル
追々實詰延岡深山ニ籠ルトモ承ル降參人餘程有之／
皆市中ニ連越久成寺ニ置ク討死ト覚悟之者モ餘程有
ルヨシ／肥後ヒトヨシヘモ籠ルトモ承ル會斗(注一)
本営鼎山所々仮屋小屋建／馬小屋建又ハ煮賣小屋
所々他方否遊女モ連来リ借宅多分／借屋賃一日五拾
錢官軍勢夥敷人夫當所ニ居候分四千人余／一日賄八
錢四厘宛握りめしニツさばニツ宛此賄料一日八百四
拾円／馬壹疋壹円馬方壹人五拾錢百疋ニして百五拾
円人夫賃三拾錢／初メ三拾五錢之処願出候者多分ニ
テ五錢直下ケ戰爭之ヶ所ニ出候者／壹円五拾錢より
撻二円と承ル又横川ニテモ四千余人／黒沢ニテモ四

千余人其外用心夫ト申スカ澤山人夫斗一万五千余人
モ可有承ル輜重部／警部巡查警視隊過分来リ居ル此
宿兩町何万人ト申ス／ガ入込候故諸色大高直湯屋も
所々一日三円四円ツ、取上候由髪／結所々是も三円
四円ハ取上候由シヤンキリ賃拾錢と承ル／會斗かひとノ咄
ニ先達迄ニ大藏省否取下ケ之金員四千万円／此上如
何程可有難斗と承ル旧藩市中共餘程之潤ニ相成ル／
他所ニテハ焼失有之候へ共佐伯ハ夫も無ク幸ノ事也

【読み下し】一

明治十丁丑春 薩州西郷吉之助隆盛蜂起

五月十三四日頃、重岡に巡查罷り越し、旧藩の人七八
名、他方よりも罷り越し居り、屯所相詰め候処、薩賊
纒むすの人数にて押し入る。然るに、皆刀劔は所持致さず、
銘々山林に逃げ散る。

類は 田の中に打ち伏し居るを追いまわし 山林
にも追い詰め 打ち伏し居る上をも飛び越し 追
いまわし候らえども 幸いと夕暮にて、人顔も見え兼ね
候時分にて 皆々別条無く逃げ延びる。

竹田より出戻り候巡查一人討死す(注二)

翌日は、此の地に來る評判これあり。旧藩市中とも大騒動。銘々荷物片付け近在浦へ持ち運び数百の小船、東は町より塩濱まで繋がり、西は蛇崎までも繋がる。一方ならざる混雑。然る処、用務所よりの觸れに、急に來たる事も有るまじく遠見遣わし、これある間來たり候様見受け候えば、知らし大鐘突き申すべし。それを合図に立ち退く様と觸れあり候。

廿六日、前八時頃大鐘鳴らし騒ぎ立て、我先にと立ち退き候。店方は戸をノメて一人も居らぬ家もあり、又は家内は退いて留守番する家もある。

午後二時頃賊入り込み、一番に用務所に押し入り候えども、一人も居り申さず。裁判所、戸倉借宅に押し入れども一人も居り申さず。同所土蔵を開き、荷物痛め候由に候。それより市中に來たり亭主相尋ね候えども、昨日より出候て行方相知れずと皆申す。何事なし。

旧藩にも參られ候えども一人も居る者これなく、市中に留守番ある家宿頼まれる。

銘々相賄い候。夜回り油断なく致される由。翌朝は皆々立ち出で、所々相堅め居る由。當時渡町住居にて

平穩に暮らし候。前七時頃炮發近く聞こえる。石間沖に軍艦來たり(注三)

十人ばかり傳間に乗り組み上陸の砌、蟹田坂に待ち受け炮發五六人討ち果たす由。傳間はそのまま引き取る由。それより軍艦より市中に向け度々大炮發し候らえども、途中にて玉はひらき落ちる。此の玉の通るを、渡町畑に出て見る。二三度は船頭町までも通るあれども遠方にて火移り申さず、幸いの事なり。

翌日は引き払い、臼杵に罷り越す由。又臼杵より當近在に來り、屯致しおり候處、官軍に追々責め詰められ、横川に引き取り、山に籠り候。酒屋裏畑より互いに炮戦いたしおり。家の屋根を打ち越し、瓦余程傷める。酒屋の者皆々立ち退き候。市太郎その砌、罷り越しおり候て右の咄書き候。それより字目に押し寄せ、日々炮戦討死の死骸日々市中に持ち運びに成り候。横川酒屋裏の畑に飯屋建て、人夫四千人も居る由。酒屋も貸し渡し候。昼夜をわかつず出入りにて何日も一睡相ならず。

月形市に煮売屋百余軒も出来、又黒澤にても日々炮戦の音聞こえる。追々責め詰め、延岡深山に籠るとも